

法華經「方便品」における 仏像造像の材料について

野 際 清 美

〔I〕 研究の目的

今日まで研究者によって、『法華經』の成立年代について様々な視点にたつて論究されてきている^{註1}。その中の一つに、「方便品」の偈文中に仏像造像に関する記述があり^{註2}、これをよりどころの一つとして『法華經』の成立年代が論じられてきた。

しかし、偈文の中には、仏像造像の材料についての記述が存在するので、これらの材料によって、様々な彫刻技法を推察し、そのことによって仏像造像に関する記述年代を考察していくことを目的としていきたい。

（註）

1 久保継成著『法華經菩薩思想の基礎』昭和62年 17頁～21頁参照

2 ratnā-mayā' bimba tathāiva ke-cid
dvātriṃśati-lakṣaṇa-rūpa-dhāriṇaḥ |
uddiśya kārāpita yehi cāpi
te sarvi bodhāya abhūṣi lābhinaḥ || 83 ||
WT.P48, 11～14, KN.P.50, 113～14
WT. では bodhāya が KN では bodhiya
ye sapta-ratnā-maya tatra ke-cid
ye tāmrikā vā tatha kāṃsikā vā |
kārāpayiṣū sugatāna bimba
te sarvi bodhāya abhūṣi lābhinaḥ || 84 ||
sisasya lohasya ca mṛttikāya vā

法華經の「方便品」における仏像造像の材料について（野際）

kārāpayiṣū sugatāna vīgrahān |
ye pusta-karmā-maya darśanīyāms
te sarvi bodhāya abhūṣi lābhinaḥ || 85 ||
WT.P48, 15~112., KN.P50, 114~115
KN.P51, 11~12 KNでは. bodhiya
dhātūṣu yaiś' cāpi tathāgatānāṃ
stūpeṣu vā mṛttika-vīgrāheṣu vā |
ālekhyā-bhittīṣv api pāṃsu-stūpe
puṣpā ca gandhā ca pradatta āsit || 89 ||
WT.P49, 12~15, KN.P51, 19~110

〔Ⅱ〕本論論拠の資料としては

(イ) 本論のサンスクリット本は

KN : Saddharma puṇḍarīka, ed. by H. Kern and Bunyiu Nanjio

(=Bibliotheca Buddhica X) (st. petersburg 1908~1912) により (KN. p.18, 1.2→KN, page 18 line 2) のように略記を用いた。

WT : 改訂 梵文法華經 Saddharma-puṇḍarīka-Sūtram, romanized and revised text of the Bibliotheca Buddhica publication by consulting a Skt. ms. & Tibetan and Chinese translations by Prof. U. Wogihara and C. Tsuchida (Tokyo 1934~35)

も、KN. と同様の略記で示した。

(ロ) 漢訳に関しては

【妙法蓮華經】鳩摩羅什訳（妙法華、羅什訳）の対応箇所を示し、サンスクリット本との異同は必要に応じて示した。又一部【正法華經】竺法護訳（正法華、法護訳）にも言及した。これらは

大 : 大正新脩大藏經（大正藏經）により、（大九、8下>→大正新脩大藏經第9卷8頁下段）のように略記した。

法華經の「方便品」における仏像造像の材料について（野際）

(ハ) チベット訳に関しては

N : 中村瑞隆「Dam pañi chos pad ma dkar po shes bya ba theg pa chen poñi mdo」(法華文化研究、第2号～第12号、立正大学)

により、(N50、15→中村校訂本50頁、15行)のように略記した。

なお、引用書の一部は以下のように略記した。

アプテ : V. S. Apte, The Practical Sanskrit-English Dictionary 臨川書店 1986

モニエル : Monier-Williams【Sanskrit-English Dictionary】Oxford University Press

梵和辞典 : 鈴木學術財団編【梵和大辞典】講談社 1988

チャンドラ・ダス : Chandra Das, Tibetan-English Dictionary 臨川書店 1988

チベット語字典 : 芳村修基編【チベット語字典】法蔵館 昭和61年

Edgerton : Buddhist Hybrid Sanskrit Grammar and Dictionary, by Franklin Edgerton, New Haven 1953

〔Ⅲ〕法華經「方便品」の仏像造像の 材料と彫刻技法について

仏陀は、はじめから人間像で表現されていたわけではなく、象徴的に表現された。

それは、吉祥文、三宝標、法輪、聖壇、經行石、聖樹、法輪柱、火炎柱、空の御座、仏足跡等を単独にもしくは、組み合わせて、そこに釈尊が存在していることを暗示する表現方法をとっていた。その後、現在までの研究結果によれば、仏像の出現は、西暦後1世紀の後半ないし2世紀初期頃ではないかと推定されている。これは、クシャン朝の国王カニシカI世が金貨と銅貨に釈尊の立像を刻印して、仏陀像としては、比較的遅い形式を示しているため、それ

に先行する仏像が存在していたのではないかと考えられる。¹²

さて、「方便品」の偈頌中、第83偈、第84偈、第85偈、第89偈では、仏像造像に関する記述があり、特に注目すべきことは、その材料について説かれていることである。

まずはじめに、第83偈では、貴石で制作された像 (ratnā-mayā bimba) を作らせたり、第84偈では、七つの宝からなる (sapta-ratnā-maya) 像や銅 (tāmrikā) や真鍮 (kāṃsika) で善逝の像 (sugatāna bimba) を作らせる (kārapayīṣū) と説かれている。第83偈の ratnā とは、宝石又は貴石のことで、貴石を材料として、そのものに仏像を彫刻家又は細工師に作らせたということである。さらに第84偈の七つの宝からなるというこの七種類とは『妙法華』¹³では、(1)金 (2)銀 (3)琉璃—青い色をしたラピスラズリ、(4)車渠 (磲磲)—シャコ貝¹⁴ (5)馬瑙 (6)真珠 (7)玫瑰 (まいえ、まいかい)—赤い宝石と説かれている。又『正法華』¹⁵では、(1)金 (2)銀 (3)琉璃 (4)水精 水晶のこと (5)車渠 (6)馬瑙 (7)珊瑚 (8)碧玉、緑又は青色の石、あるいは(1)~(7)まで同じで(8)が真珠、あるいは(1)~(4)まで同じで、(5)珊瑚 (6)虎魄 (こはく) (7)車渠 (8)馬瑙となっている。サンスクリット本¹⁶では (1)金 (suvarṇasya) (2)銀 (rūpyasya) (3) (vaiḍūryasya) 猫眼石、瑠璃¹⁷ キャッツアイ¹⁸ (4)水晶又はガラス (sphāṭikaya) (5)赤真珠¹⁹ 赤い宝石 (lohitamukter) (6)エメラルド (aśmagarbhasya) (7)珊瑚 (musāragalvasya) となっている。チベット訳では、(1)金 (gser) (2)銀 (dñul) (3)瑠璃¹² 又はマラカイト又はクリソライト¹¹ (baidūrya) (4)水晶 (śel) (5)赤珠 赤色の真珠 (mutig dmar po) (6)馬瑙 (dañ rdoḥi snīñ po) (7)こはく (spug) である。このように七種類の宝は、サンスクリット本、漢訳、チベット訳では、相違がみられる。

この第84偈の七つの宝からなるということは、おそらく、金や銀などに数種類の貴石をうめこむ象嵌という技法を用いて細工師に作らせたのではないかと考えられる。アフガニスタンのピーマラーンで出土した舍利容器は、金に釈迦如

法華經の「方便品」における仏像造像の材料について（野際）

来等の図像を打ち出し、ガーネットなどを象嵌した豪華なものである。^{註14 (四1)}

この金の採取方法は、ガンダーラ及びインドにおいては、砂金によるもので、他に金を生むもう一つの源は、ローマ帝国との通商であった。又宝石の原石は、ガンダーラ周辺地域とインドから産出する他は、やはり通商であった。さらに金属（青銅、銅、銀および金等）を細工する技術は、古来からの伝統に基づいており、この伝統は、合金の秘密に通じた遊牧民たちによってインド北西部に根を下すことになった。この技法は、ガンダーラを経てインドまで伝えられた。タキシラの近くに位置するシルカップでは、金銀細工師の道具類が住居址内から発見された。^{註15}

さらに、第84偈では、銅を素材とした仏像や、真鍮を素材とした仏像が作られた。真鍮は、銅と亜鉛との合金である。

又第85偈では鉛（sisasya）と鉄（lohasya）、loha には銅^{註16}という意味もあるが、これらを材料とした、いわゆる青銅を素材にした金属像ではないかと考えられる。青銅と一般に称されるものは、本来は、銅と錫との合金であるが、考古学あるいは美術史学で一般に青銅といわれるものは厳密な意味での青銅ばかりでなく、ほとんど錫を含まない銅や、鉛、砒素、鉄さらにニッケル、アンチモン、亜鉛などを含有する合金をも広く青銅と呼んでいる。^{註17}さらに、粘土（mr̥ttikāya）を素材とする塑像の粘土は一般的に「泥」と呼ばれている。粘土を用いて造形する技法はすでにグレコ・バクトリア（前3世紀～前2世紀）の工房で用いられたもので、タジキスタンのタフティ・サンギーンで、王侯頭部が出土している。^{註18}さらにこの偈では、漆喰でつくられた塑像（pustakarman-maya）も制作された。漆喰とは石灰の唐音で、石灰は、生石灰及び、消石灰をさし、石灰岩を高温で加熱すると二酸化炭素と生石灰ができる。生石灰と水とが作用すると消石灰となる。^{註19}これを主原料とする造形素材をストッコ（stucco）と呼ばれる。この塑像は、作成された地域、制作年代によって混合する材料および、造形方法に相違がある。たとえば、ガンダーラのストッコ

コは、主原料に砂や石灰岩の粉を混ぜる場合が多い。中国では、主原料に植物繊維等を混ぜる。^{E20}

このように、造形にストゥッコすなわち漆喰を用いた技法は、古代エジプト（紀元前1800年頃）にまでさかのぼることができ、それは、木製の人形棺に白い漆喰を塗り、さらに彩色が施されているものが出土している。^{E21(E2)} またギリシャ、ローマの建築の内部にはストゥッコが使われ壁面を造り、ローマ時代のポンペイの壁画の壁もストゥッコである。この完成された漆喰の技法がアレキサンダー大王の東征によって広まったヘレニズム文化の影響によって寺院建築の壁面装飾技法とともに伝えられ様々な造像の技法に発展したものと考えられる。^{E22} たとえば、アルサケス朝のトルクメニスタンの旧ニサ出土（前2世紀）の「ヘルメットをかぶった兵士」の頭部^(四三)や「若者」の頭部は、粘土で成形し、表面にストゥッコを塗って着色している。^{E23}

特にストゥッコの像は、中央アジアや西アジアでは神像等の製作に使われていたのでこの手法が東漸して仏像の製作に使用されたのはごく自然のことである。

次に「妙法華」で説かれている造像の素材は、(1)七宝 (2)鍮石 (3)赤白銅 (4)白鐵 (5)鉛 (6)錫 (7)鉄 (8)木 (9)泥 (10)膠漆布^{E24}で、(1)七宝については、前述した通りである。(2)鍮石は真鍮のことで銅と亜鉛の合金、(3)赤白銅は銅に金や銀などの金属を加えた合金、(4)白鐵は銅と亜鉛の合金で鉄、アンチモン、砒素などを含む。他に鉛、錫、鉄など金属を材料にして、仏像が制作され、さらに、木や泥や膠漆布については、木像、泥像、乾漆像等が造られたと考えられる。乾漆像には、脱乾漆造と木心乾漆造の二方法がある。ここでは、脱乾漆造という技法で制作されたのではないかと考えられる。その理由は次の通りである。この技法は、古くは、^{そく}即とか^{きょうちよ}夾紵と呼ばれる技法で、原型を泥土で造り、その上に麻布を漆で幾重にも塗り重ねこれを充分乾燥させた後に像を割って内部の土をとり^{だっかんしつづくり}のぞき内部に木枠^{もくしん}をおき、像の表面に金箔なり、彩色なりをほ

法華経の「方便品」における仏像造像の材料について（野際）

どこして完成させる。夾紵の夾とは、はさむという意味で、紵は麻の一種でいちびのことでこの名称がある。この技法は、中国の独特なものであり、この技術を用いた漆器が、馬王堆漢墓（中国湖南省古代遺跡 紀元前186年頃）より多く出土している。^{註25}

夾紵像は、中国の発達した漆文化の中で、伝統的な夾紵の技法と、塑像制作と、行道という需要によって結びついて生まれたものと考えられる。^{註26}

第89偈では、粘土で作られた像（mṛttika-vigraheṣu）について説かれている。『妙法華』では「宝像」と訳されている。

さらに『正法華経』では、仏像の材料として、(1)宝 (2)七宝 (3)銅 (4)碧玉^{註27} と訳されている。

特に金銀宝石等を材料とした仏像に関しては、こうして金銀や宝石貴石を尊いものとして考える地域風土が考えられる。通商の社会ではいつも移動して歩くので、軽くて、小さく、附加価値のある金銀宝石が必要となる。

さらに法華経の「信解品」の中の「長者と窮子の喩え」の長者の出現は、この地域が、こうした通商経済の発達した所であることを示しているように、法華経成立の世界は、こうした、金銀宝石を必要とする社会であったことを示している。この点から、仏像の材料も当然当時の社会状況を示しているといえよう。

（註）

- 1 【図説日本仏教の原像】藤田宏達著 「仏陀の讃仰」法蔵館 昭和57年 P.39
- 2 田辺勝美監修東京芸術大学美術館編修『ガンダーラとシルクロードの美術』朝日新聞社2000 P.47
- 3 大九、21中、下、32中
- 4 高木紀子編『宝石の四季』第107号ジュエリージャーナル1993年 P.42 貝類のうちでは最も大きな二枚貝で、南洋産の白い光沢のある美しい貝殻である。今では、加工されて宝飾品として用いられる例はほとんど見られない。
- 5 大九、87下、88上、102中
- 6 KN.p.151, I1~ WT.p.136, l.16~

法華經の「方便品」における仏像造像の材料について（野際）

- KN.p.239, 17~ WT.p.207, 1.10
- 7 梵和
 - 8 アプテ、モニエル
 - 9 梵和
 - 10 モニエル
 - 11 N.151, 1.1
 - 12 チベット語字典
 - 13 チャンドラ・ダス
 - 14 田辺勝美、前田耕作責任編集『世界美術大全集 東洋編 第15巻 中央アジア』小学館1999 p.378
 - 15 ティッソ、フランシーヌ（前田耕作監修前田龍彦・佐野満里子訳）『図説ガンダーラ—異文化交流地域の性格と風俗—』東京美術1993 p.216~217
 - 16 モニエル、アプテ
 - 17 フランク・B. ギブニー—『ブリタニカ国際大百科事典』1974
 - 18 田辺勝美、前田耕作責任編集『世界美術大全集 東洋編 第15巻 中央アジア』小学館1999 p.130
 - 19 フランク・B; ギブニー—『ブリタニカ国際大百科事典』ティビーエス・ブリタニカ1974 新村 出『広辞苑』岩波書店1992
 - 20 中村元・久野健『仏教美術事典』東京書籍株式会社 平成14年 p.481
 - 21 吉村作治監修『古代エジプト展』古代エジプト展事務局2002 p.47
 - 22 本間紀男著『天平彫刻の技法』雄山閣出版 平成10年 p.226
 - 23 田辺勝美、前田耕作責任編集『世界美術大全集 東洋編 第15巻 中央アジア』小学館1999 p.135
 - 24 大九、8下~大九、9上
 - 25 稲畑耕一郎/西江清高監修『中国古代文明の原像—発掘が語る大地の至宝—下巻』アジア文化交流協会 p.218
 - 26 本間紀男著『天平彫刻の技法』雄山閣出版 平成10年 p.57
 - 27 大九、71中

〔Ⅳ〕 仏像の制作された年代及び材料と地域について

これまでの考古学的な成果により、インド及びガンダーラとその周辺地域及び西域における、仏像の材料と制作年代について理解を深めるために一覽者に

法華經の「方便品」における仏像造像の材料について（野際）

まとめてみた。

インド本土（地図1）

仏像制作年代	材 料	出 土 地 域
A.D. 1世紀後半	砂 岩	インド（ウッタール・プラデーシュ州、 マトゥラー）
	砂 岩	インド（ウッタール・プラデーシュ州、 マトゥラー、カトラ）
2世紀前半 在銘	砂 岩	インド（ウッタール・プラデーシュ州、 ジャマールプル）
	カニシュカ3年 砂 岩	インド（ウッタール・プラデーシュ州、 サルナート）
	カニシュカ4年 砂 岩	インド（ウッタール・プラデーシュ州、 マトゥラー）
2世紀	砂 岩	インド（ウッタール・プラデーシュ州、 マトゥラー、チャウバラ）
	砂 岩	インド（ウッタール・プラデーシュ州、 アヒチャトラ）
	砂 岩	インド（ウッタール・プラデーシュ州、 マトゥラー、プーテーシュワル）
	砂 岩	インド（アー、ドラ・プラデーシュ州、 アマラーヴァティー）
2世紀後半	砂 岩	インド（ウッタール・プラデーシュ州、 マトゥラー、ラージガート）
3世紀前半	砂 岩	インド（ウッタール・プラデーシュ州、 サハート・マハート）
	砂 岩	インド（ウッタール・プラデーシュ州、 マトゥラー・ジャマールプル）
	石 灰 岩	インド（アーンドラ・プラデーシュ州、 アマラーヴァティー）
3世紀	石 灰 岩	インド（アーンドラ・プラデーシュ州、 アマラーヴァティー）
	石 灰 岩	インド（アーンドラ・プラデーシュ州、 ヴィジャテルプラム）
3世紀後半	石 灰 岩	インド（アーンドラ・プラデーシュ州、 ナーガールジュナコンダ）
3～4世紀	石 灰 岩	インド（アーンドラ・プラデーシュ州、 ナーガールジュナコンダ）
	砂 岩	インド（ビハール州、ボードガヤー）

法華經の「方便品」における仏像造像の材料について（野際）

5世紀（434年）	砂 岩	インド（ウツタル・プラデーシュ州、 マトゥラー・ゴヴィンドナガル）
-----------	-----	--------------------------------------

ガンダーラとその周辺地域及び西域（地図2）

仏像制作年代	材 料	出 土 地 域
A.D. 1～2世紀	片 岩 片 岩 片 岩 片 岩 片 岩 金・ガーネット 象嵌 （舍利容器圖像 を打ち出し）	パキスタン（ガンダーラ） パキスタン（ガンダーラ・シクリ） パキスタン（ローリヤーン・タンガイ） パキスタン（スワート） （ジャマール・ガリ） パキスタン（ジャムルード） （マーマネ・デリー） アフガニスタン（ビーマラーン）
A.D. 2世紀 カニシュカI世 （コイン）	片 岩 片 岩 片 岩 金	パキスタン（ガンダーラ・ジャムルード） パキスタン（ハザーラ・ザールデリー） パキスタン（ガンダーラ、 マーマネ・デリー） パキスタン（ガンダーラ）
A.D. 1～3世紀	ストウッコ	パキスタン（ガンダーラ）
A.D. 2～3世紀	片 岩 片 岩 片 岩 片 岩 片 岩 片 岩 銅・鍍金	パキスタン（ガンダーラ） （ガンダーラ・カラマル） パキスタン（ガンダーラ・サリ・バロール） （ガンダーラ・シクリ） パキスタン（ガンダーラ・ローリヤーン・ タンガイ） パキスタン（ガンダーラ・ベシヤワル） （ガンダーラ・ジャマールガリ） アフガニスタン（バイターヴァ） パキスタン（ガンダーラ・マラカンド） パキスタン（ガンダーラ、シャー、ジー・ キー・デリー）
3世紀	片 岩	パキスタン（ガンダーラ・マーマネ・ デリー）
A.D. 2～4世紀	石 灰 岩 石 灰 岩 片 岩	ウズベキスタン（ファヤーズ・テベ） ウズベキスタン（テルメズ） ガンダーラ（スワート）

法華經の「方便品」における仏像造像の材料について（野際）

	ストウッコ	ウズベキスタン（ファヤーズ・テベ）
A.D. 3～4世紀	片 岩	アフガニスタン（カブール・カピサ）
	片 岩	アフガニスタン（ショトラク）
	片 岩	パキスタン（ガンダーラ・タフテイ・バイ）
	片 岩	パキスタン（ガンダーラ・サハリ・ バハロール）
	片 岩	パキスタン（ガンダーラ・マーマーネ・ デーリー）
	片 岩	パキスタン（ガンダーラ・モハメッド・ ナリ）
	片 岩	パキスタン（ガンダーラ）
	片 岩	アフガニスタン（ハッダ）
	石 灰 岩	ウズベキスタン（カラ・テバ）
	石 灰 岩	アフガニスタン（ハッダ）
	石膏制の 仏像の型	ウズベキスタン（カラ・テバ）
	ストウッコ	アフガニスタン（ハッダ）
	ストウッコ	パキスタン（ガンダーラ）
	粘 土	アフガニスタン（ハッダ）
	粘 土	パキスタン（ガンダーラ・スワート）
	青 銅	アフガニスタン（ダルガイ）
銅・鍍金 木	新疆ウイグル自治区（ホータン） 新疆ウイグル自治区（ローラン）	
A.D. 3～5世紀	片 岩	パキスタン（ガンダーラ、ベシャワール）
	ストウッコ	パキスタン（ガンダーラ）
A.D. 4～5世紀	砂 岩	パキスタン（ガンダーラ・サリ・バロール）
	ストウッコ	ガンダーラ（タキシラ・ダルヌラージカ、 モラモラドウ、シルカッパ）
	ストウッコ	アフガニスタン（ハッダ）
	ストウッコ	パキスタン（スワート・ニモグラム、 プトカラ）
	粘 土	アフガニスタン（バーミヤン）
	粘 土、 ストウッコ	ウズベキスタン（ダリヴェルジン・テベ）
	粘 土 木	新疆ウイグル自治区（ホータン） 新疆ウイグル自治区（トゥムシユク）
A.D. 4～6世紀	青 銅	パキスタン（ガンダーラ・サリ・バロール）
	ストウッコ	パキスタン（ガンダーラ）

〔V〕 結論

このように、インド本土での、仏像の出現は、A.D. 1世紀後半にマトゥラーにおいてはじめて砂岩を用いて制作された。マトゥラー以外では、仏像造像の材料として、砂岩及び石灰岩が主に用いられた。ただし6世紀に北インドで青銅像が出土したが、インドの鑄造彫刻の歴史は古くインダス文明にまで遡る。しかしパーラ時代（750～1199）以前の作品はとくしてつぶされたためか現存するのは、非常に少なく、本像の制作地、年代についても正確なことはわからない。

一方、ガンダーラ及びその周辺地域においては、A.D. 1～2世紀に仏像が制作されはじめた。これらの地域及び西域では、仏像造像の材料として、片岩、石灰岩、金や青銅等の金属、それに貴石、スタッコ、粘土、石膏、木等様々な材料が使われている。

これらの仏像彫刻は、インド本土においては、仏教寺院内や入口を飾ったり、独立した祠堂内に安置したり、小型ストゥーパの胴部に彫刻したりさらに、欄楯柱や貫（柱を立て並べ、それらを横方向の材でつないであるもの）、笠石（上に押さえとなる材）等に施された。ガンダーラ及びその周辺地域と西域においては、仏教寺院の壁面やストゥーパの基壇及び胴部、階段蹴込み部、ストゥーパの伏鉢正面、舍利容器の蓋や本体、等彫刻が施され、さらに祠堂に安置された。

ところで、法華經「方便品」には、仏像造像の材料として岩又は石を素材とした記述はないが第80偈の中で石でできた（śailesu）仏塔（stūpān）の建立について説かれている。ガンダーラのローリヤーン・タンガイ出土の仏塔（A.D. 2～3世紀）は片岩製で、その基壇及び胴部には、仏像の浮彫りはあるが、ガンダーラのタキシラ、シルカップ遺跡の仏塔基壇（A.D. 1世紀）に

法華經の「方便品」における仏像造像の材料について（野際）

は仏像彫刻はない。このようなことから必ずしも石の仏像彫刻がなかったとはいえない。一方ストウッコの仏像は、形の整った切り石を積み、この上に粘土が漆喰で上塗りしてある仏塔基壇の上にぬりつけてもり上げて製作したようである。

さらに、金属を用いた造像については、インド本土と同様に、鑄潰されてしまうことも多く遺例は数少ない。又粘土やストウッコの仏像は、材質としては、比較的使いやすいが、初期のストウッコの仏像は、造形的にみてもだれもが簡単に製作できるようには思えない。金属や貴石を用いた造像も、専門的な知識や技術や道具がないと制作することができず、第83偈、第84偈、第85偈で説かれているように「仏像を作らせた」という記述は、多くの信者たちが、手軽に作ったというよりもそれぞれの専門家に制作を依頼したと考えるのが当然である。

次にストウッコの仏像の制作年代は、文献によれば、3世紀頃からであり、型を用いて多くの人々が制作できるようになったのは、3～4世紀あるいは、4～5世紀以降だといわれている。前述したように「方便品」で説くストウッコの仏像は、初期のものだと考えられ、(Ⅳ)章の表によると、すでにA.D. 1～3世紀に制作されたとみられるストウッコの仏像がガンダーラにおいて出土している^(註4)。さらにガンダーラ、モハメッド・ナリ出土の片岩製浮彫「仏説法図」^(註7)が発見され、この図像の解釈に諸説あつて定まらないが、なかでも『法華經』などに述べている、仏が深い三昧に入り大光明を発して仏国土を明らかにする場面とする説が有力のようである。これが3～4世紀に作られたとされているのでこれ以前には、すでに法華經が成立していたのではないかと考えられる。このようなことから「方便品」の仏像造像の材料に関する記述については、ガンダーラ文化圏及びその周辺地域において、A.D. 1～3世紀の間になされたのではないかと思われる。

なお、このテーマを探究する機会を得られたのは、多くの仏教学の研究者、

法華經の「方便品」における仏像造像の材料について（野際）

仏教美術の研究者及び考古学の研究者等の貴重な文献ならびに発掘調査の賜によるものであり、又この論文をまとめるにあたり、身延山大学名誉教授（毘沙門天妙法寺御山主）の高橋堯昭先生の御教示をいただいたことに心から敬意と感謝の意を表します。



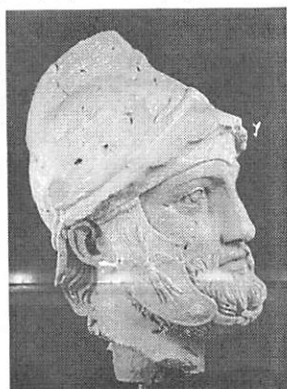
(図1) 舍利容器

材 料；金・ガーネット
出土地；アフガニスタン、ビーマラーン
年 代；1～2世紀



(図2) 彩色木棺の蓋の上部

材 料；木、漆喰
出土地；不明
年 代；前1800年頃



(図3) 王侯または兵士頭部

材 料；粘土、漆喰
出土地；トルクメニスタン、旧ニサ
年 代；前2世紀



(図4) 仏陀頭部

材 料；ストゥッコ
出土地；ガンダーラ
年 代；1～3世紀

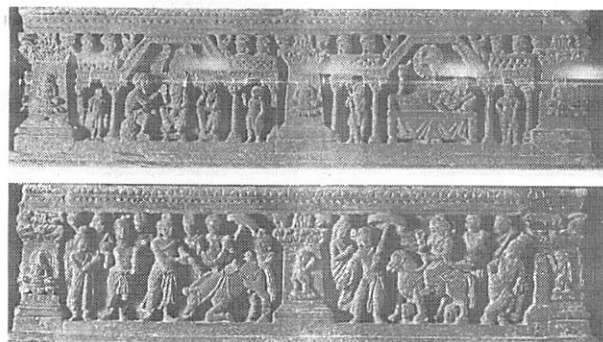
法華経の「方便品」における仏像造像の材料について（野際）

（図5）仏塔モデル

材 料；片岩

出土地；パキスタン、
ガンダーラ、
ローリヤーン・タンガイ

年 代；2～3世紀



仏塔基壇の彫刻

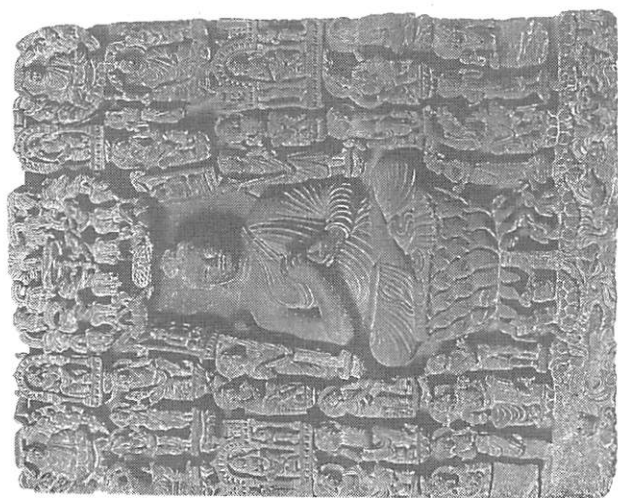
（図6）仏塔基壇

材 料；石

出土地；パキスタン、
ガンダーラ、
タキシラ、
シルカップ遺跡

年 代；1世紀





(図7)「仏説法図」

材料；片岩

地土出；ガンダーラ、モハメッド・ナリ

年代；3～4世紀

法華經の「方便品」における仏像造像の材料について（野際）

参考文献A

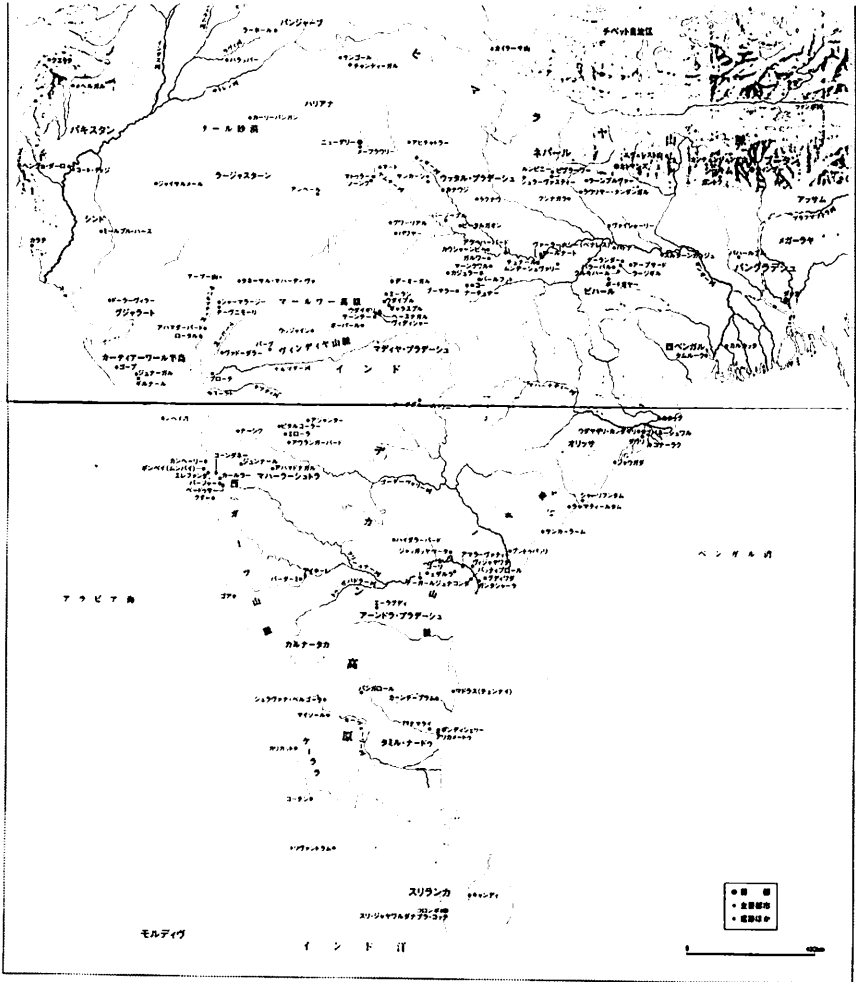
- ・肥塚隆、宮治昭責任編集【世界美術大全集東洋編 第13巻 インド(1)】小学館 2000
- ・高田修【仏像の起源】岩波書店 1967
- ・高田修【仏像の誕生】岩波書店 1987
- ・田辺勝美、前田耕作責任編集【世界美術大全集 東洋編 第15巻 中央アジア】小学館 1999
- ・ティッソ、フランシヌ（前田耕作監修／前田龍彦、佐野満里子訳）【図説ガンダーラ—異文化交流地域の性格と風俗—】東京美術 1993
- ・中村元・久野健監修【仏教美術辞典】東京書籍 2000
- ・田辺勝美監修【ガンダーラとシルクロードの美術】朝日新聞社 2000
- ・前田たつひこ監修【アフガニスタン悠久の歴史展】東京芸術大学、NHK、NHKプロモーション 2002
- ・東京国立博物館、NHK、NHKプロモーション編【パキスタン・ガンダーラ彫刻展】NHK、NHKプロモーション 2002
- ・東京国立博物館、NHK、NHKプロモーション編【シルクロード 絹と黄金の道】NHK、NHKプロモーション 2002
- ・東京国立博物館、NHK、NHKプロモーション編【インド・マトゥラー彫刻展】NHK、NHKプロモーション 2002
- ・前田耕作監修【東洋美術史】美術出版社 2000
- ・加藤九祚、Sh. ピダエフ 編著【ウズベキスタン考古学新発見】東方出版 2002
- ・佛教学大学ニヤ遺跡学術研究機構【ニヤ遺跡の謎】東方出版 2002
- ・井ノ口泰淳・柳田聖山・竺沙雅章編【図説日本仏教の原像】法蔵館 昭和57年
- ・高橋堯昭著「焰肩仏を手がかりとして」（町田是正編【榎神】55号身延山短期大学学会 昭和58年）
- ・高橋堯昭著「從地涌出」（宮崎英修編【榎神】58号身延山短期大学学会 昭和61年）
- ・高橋堯昭著「数々撰出」（宮崎英修編【榎神】60号身延山短期大学学会 昭和63年）
- ・高橋堯昭著「クシャンに於ける宗教の大衆化」（宮崎英修編【榎神】65号身延山短期大学学会 平成5年）
- ・高橋堯昭著「カニシカ仏陀コイン〈掌中の珠〉の意味するもの」（身延論叢編集委員会編【身延論叢】第三号 平成十年）
- ・本間紀男著【天平彫刻の技法】雄山閣出版 平成10年
- ・ヴィディヤ・デヘージア著【インド美術】岩波書店 2002年
- ・藤田弘基 撮影【ガンダーラの遺宝】ぎょうせい 平成8年

法華經の「方便品」における仏像造像の材料について（野際）

参考文献B

- ・江島恵教（代表）『梵藏漢 法華經原典総索引』第X分冊 霊友会 1992年
- ・河口慧海訳『梵藏伝訳国訳法華經』世界文庫刊行会 大正13年
- ・坂本幸男・岩本裕訳注『法華經』岩波書店 1995年（平成7年）
- ・松壽誠廉、丹治昭義、桂紹隆訳『法華經Ⅰ、Ⅱ』中央公論社 昭和63年
- ・菅沼晃『新・サンスクリットの基礎（上）（下）』平河出版社 1994年
- ・岩野真雄編輯兼発行者『国訳一切經印度撰述部 法華部全一』大東出版社 昭和56年
- ・中村瑞隆著『現代語訳法華經上』春秋社 1995年
- ・中村元『大乘仏教Ⅱ 法華經』東京書籍株式会社 昭和62年
- ・横超慧日、諏訪義純『羅什』大蔵出版 1996年
- ・布施浩岳著『法華經成立史』大東出版社 昭和42年
- ・河村孝昭著『法華經概説』国書刊行会 平成元年

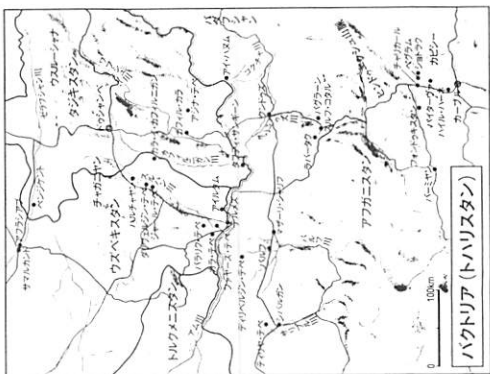
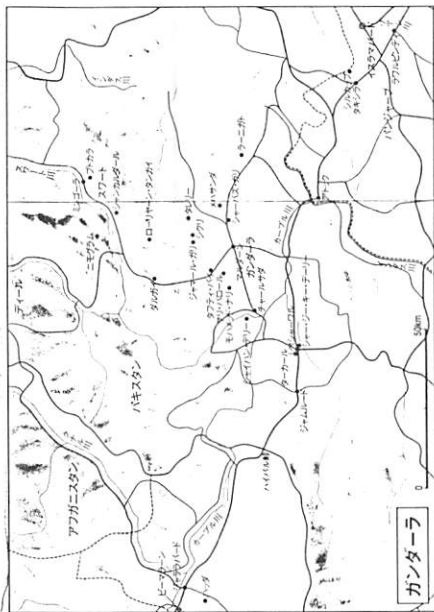
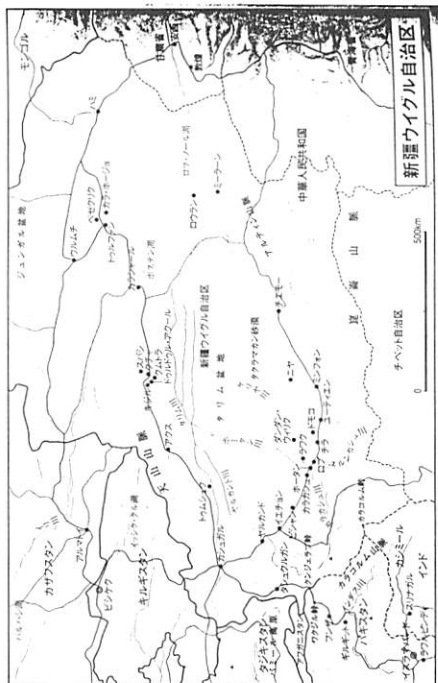
法華經の「方便品」における仏像造像の材料について（野際）



インド（地図1）肥塚 隆、宮治 昭責任編集

『世界美術大全集東洋編第13巻インド(1)』小学館2000より引用

法華経の「方便品」における仏像造像の材料について（野際）



(地図2) 田辺勝美、前田耕作責任編集『世界美術大全集東洋編第15巻中央アジア』小学館1999より引用